

日本プロレタリア文学集・13



ロレタリア文学集・13

芸戦線作家集 4

日本プロレタリア文学集・13

「文芸戦線」作家集 四

定価 二六〇〇円

一九八六年二月二十五日 初版 ©

発行者 松 宮 龍 起

発行所 株式会社 新日本出版社

〒150 東京都渋谷区本町一の八の七
電話 (〇三) 三二〇七一一
振替 東京 三一三六八一

印刷所 光陽印刷株式会社
製本所 みさと製本印刷株式会社

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前承諾をお求めください。

ISBN4-406-01361-X C0393

日本プロレタリア文学集・13

「文芸戦線」作家集

目次

細田源吉

穿きもの……………九

巷路過程……………三〇

九九九九人と一人……………六〇

全休前……………六九

同志は呼ぶ……………七九

信 頼……………八五

細田民樹

或る砲手の死……………一〇一

大檢拳の後……………二三

黒の死刑女囚……………二三

オラウの力……………二五

トタン塀の中……………二六

間宮茂輔

朽ちゆく望楼……………二七

闇……………二八

搾る為の工事……………二九

鉦山の私娼窟……………三〇

小島 勗

地平に現れるもの……………三七

怖ろしき揺籃……………三〇五

転戦十日間……………三三

警備員……………三三

今野大力

トンカトントンカッタカタ……………四三

今村恒夫

棹取夫今吉の死……………四七

共同製作

柵の外へ……………岩藤雪夫・小島 勲・里村欣三…三五

解説……………津田 孝…三七

発表年月日と掲載文献……………四三

細
田
源
吉

穿きもの

冬も半ばになった。村落時代を忘れないような野分が、この郊外の都会移住者の大部落を襲った。

ところが五年前の道路は小砂利を喰い込んでやや歩きよくなったと思うと、山や畑を拓いた二間から六間までの新道路は、朝の八時前後からまるで出水の後のような始末のつかない霜汁を流した。

森や林は伐り倒された。青い麦畑の丘陵は片端から削りとられた。野の百姓達は扁平に扁平にと貸地を展げ、日毎に異装される町の姿を待ち望んでいる。そこで八百八十八町歩のこの大部落には、およそ想像もつかない迅速な率で七百三十戸、三千あまりの人口だったものが、十年後の今日では四千三百余戸、二万の人口をばら撒いたのであった。一坪二円位だった地価が、十五円から二十円になり、現在

ではそれほどでもない場所ですえも二百円の相場が立った。それにつれて借地料も上り、一反歩十六円、坪あたり四厘ばかりの小作料が相場だったものが、二十五銭から三十銭という飛び上り方であった。村が町になる噂も、愈々事実になりそうだった。

都会移住者の特殊なこの部落で、いつか土着の人間のようにに古ぼけ、誰からも一つの商店としての存在を忘れられた時、拙ない労苦が彼を待ち構えていた。

彼——下駄商の栗田半平の店は、ステーション通りの目ぬきの場所で、ここばかりは飾窓もガラスのヒビを紙で貼って、中には更紗きんぎょの唐草模様の風呂敷を垂れ、陽に褪せるままだった。その日も彼は土間の仕事場で、日和下駄ひよこの歯のすげ替えをやっていたが、そこへ入って来たのは、彼の家主であった。家主はその妾にこの土地で銘酒屋をさせている。

「……どうもこの家が古くなったから改築してお貸ししようと思うんで、一時立ち退いてもらいたいが。」と家主が縋々しやべと喋り出した。前から、家主は下駄屋ともいえない汚い半平の店に我慢が出来なくなっていたのであった。

「出来上ったら貸してくれますかね。」半平が念を押して

ら、その時裏口の方から客と見過^{みあや}つて出て来た若い女房の顔を見上げた。女房がなんと返事をするか、彼はとても知りたかったのだ……。なにしろ茫^{ぼん}やりして引越したら、つまらぬ目に遭うだろうと考えたから。

「ここならまだお店らしいですけど、一体どこへ引越するんですか。」彼の女房は良人^{あつと}と家主とに等分に訊きかけた。

「一時ですよ。まあ、二ヵ月です……」家主はここを追いつて立てれば、もう二度と彼が入れなくなることを見透^{みすか}していた。

「家賃は同じでしょうね。」半平の女房がそう一言突いた。「いや、それはまだ出来上った上でないと、万事費用も累^{かさ}むだろうし……」

家主はそこで引き外してそれ以上に云わなかった。なにしろ立ち退いてもらえばいいのであった。この街道が村の一本通りだった頃、この家も借手がなく、雑作^{ぞうさく}は家主が持っていたのであった。この立退には、家主は楽であった。

半平の家の引越しは風呂敷包みを二三回も下げて行けばいくらいの程度であった。一つ道具らしい道具は、女房が結婚の時に持って来た前桐の簞笥^{だんし}であった。それから、更紗の唐草模様の風呂敷を背景に釣した、壊れそこねた半

間の飾窓であった。彼が一人で裏通りの長屋へ抱え込むと、女房は顔色を暗くした。

「二ヵ月までにはみつちり稼いで、前の家へ入りましょうよ。二ヵ月でいくらか位稼げるの。」

「ま、稼いでも喰わなきゃならないからよ。……そうさ二ヵ月で無理やつて十五円も残るか？……なアに、あの家主はまた入れてくれるよ。」

そう云ったが、彼は二度と前通りの家へ入れそうにない気がした。

「もつとなんとかならない？……今までは下駄屋さんともいえただけど、これからは齒入屋^{はいはや}さんだもの……もう店じないから。」と、女房は近所の人達の噂を恐れるのであった。

普請中だといぬけるには、あまりに今度の改築が彼の状態に適わしく見えなかった。

今迄の平家が二階建になり、セメントで洋館らしく見せかけようというのであった。

「この寒の内にあんな普請をやったら、すぐ諸に剝げ落ちらあ……」

と、半平はある日普請場を覗いて、家の女房の前で嘲^{あざわら}つてみた。

家主は暮れまでにやり上げようという肚であつた。少くも、平屋で十円の家賃だったものを、五十円くらいには値上げる肚であつた。

冬の短かい日脚の中で改築は割りに捗どつた。一つの店には気の早い借主が入つた。

「無理してもあすこへ入りたい。」

彼の女房は彼を急き立てた。ところが、彼が家主に逢つて話してみると、

「お入りになりたいなら結構ですが、この普請で前のようには貸せませんよ。まア六十円、敷の六ヵ月を入れてもらわなけりあ……」そういう挨拶であつた。

雑作もこつち持ちとなると、この相談は出来ない方が当り前だつた。

「うまく店立を喰わされたな。権利がついてるぜ、あれだけの店だつたら……」と、近所の人達が彼を煽てたが、家主の方はいつも彼を外した。とうとう彼も断念してつた。

二十九だというに、三十五六にも見え、背は低く、商売は争えず屈み癖がついて、その風体は一層彼を目立たなくみすばらしくした。半平という名さえ、只の「齒入屋」の通り名に呼び替へられてしまつた。

尤も、五年前に彼がはじめてこの小村のステーションに

おりた時分は二十四五であつた。神田の大きな下駄屋で年季を入れ、二三百円の資本を握つて来たのであつた。新しい仕着姿で、やつと道普請の出来上つた駅前を歩いてみたものだった。白壁の新しい駅は、積木のように瀟洒で、静かな明るいバンガローだった。店も十軒と並んでいなかった。彼は初めて持つ世帯の好奇心から、前後も考えず、その一軒を借り、一ヵ年後には仲人話で、女房を迎えたのであつた。その頃はまだ新しい品物もあつたが、客はいつか彼の店から遠のいた。そこで古下駄を集めに廻らせようとすると、女房は仕方なしに泣きながら廻つた。

「なんだと？ 厭だ。そんならなぜこんなとこへ嫁た？」
「下駄屋だつていうから嫁たの……古下駄なんかの御用を訊いて歩くなんて厭だ！」

そういった女房は、その夕方に家を出てしまつて、それ以来、歸つて来なくなつた。

半平は躍起になつたが女房をつれ戻すことは容易でなかつた。

もし狹い掛合の出来る性分だつたら、半平も、徒に年寄の仲人を罵り帰しはしなかつたであらう。彼こそ、自分自身の誠意を、その機会に充分仲人の腹の中へ飲み込ますべ

き筈であつた。だから勿論彼も出来る限りの慎み深さをこらえていたつもりであつた。彼はきちんと膝を折つて坐つていた。毎日、歩き廻るか胡坐をかくか、それとも寝ころがるより他に生活の習慣を失つてしまつた彼としては、自分を窮屈にすることだけでも相手に対する最大の敬意であつた。口惜しいことは、彼が自分の考えを思う通りに表現の出来ないことだつた。

彼は女房に戻つてもらいさえすれば文句はないのであつた。ところが女房の方では戻りたくないために文句があるわけであつた。女房の側を代表して来た相手は、彼よりもすこしはマシに口を利いた。それも終いには、

「どうもおふくろが年を老つて、あれをこつちに放しときたがらないもんで……もうおふくろだつて生きてたところで一年か二年だから、その間まアやむを得ないでも思つて。」

こう云つたのは慥に見え透いた口実だつた。

それを聞くと彼の頭は我慢がならなくなつたのだつた。

彼は相手に飲み込ませる筈の自分の側の不平やら云い分やらを、自分で飲み込んでしまつた。その代りに彼が吐き出したのは、気短かな罵詈にしか過ぎなかつた。

「白痴にするなッ！ いい年齢して、よくもそんな馬鹿な

ことが云えたもんだ……嫌だから帰ってくれッ！」

その日の彼の肚は、家を飛び出した女房に、自分でじかに逢つて、掻き口説くつもりであつた。いらぬ口をきく仲人なんかは虚勢で追つ払つても悔いなかったのであつた。

二ヶ月ばかりもこじれていた彼の別れ話の結果は知れたことであつた。彼はその日以外二度と女房の顔を見ることが出来なくなつたのであつた。それでもまだ、彼はこつちに思いが残つてゐる以上、これなり二人の間が切れてしまふものだとは、どうしても考えられなかつた。

「おかみさんはどうした……？」誰かそんなことでも訊けば、彼は勢いもなく云うのであつた。

「後で悪い智恵をつける奴がいるもんでね、むずかしいでさ。なにしろそいつらと来たら一生でもあれの後に喰らいついてる気なんだから、あれもちよつくら歸つて来るつてわけにアいかないでさ。」

そんな時の彼の心には女房が慕わしく映るのであつた。

女房は朝も早く起きた。田舎者の癖で一日くれくれと働き廻つてゐた。肴一つ買うのでも、半時間は躊躇した。いよいよその日にも困り出してから彼女は泣きこそしたが、彼に嘯みついては来なかつた。

その女房がどうして家を飛び出してしまつたのか、それ

に對する彼の考えは、限りもなく糸をたぐるような長々しいものであった。尤も彼は一日で考え出したのではなかった。半坪しかない土間で仕事をしながら考えたり、一間しかない六疊で、一人寝のさみしさから考えたりしたのであった。なにしろ表通りから裏通りへ落ちて来たのがいけなかったのだ。その時はもう一度表通りへ帰れるつもりだった。前の店の貸主が、家の改築が出来上ったら、その都合で入ってくれてもいいからという約束だった。ところが氣がついて考えた時には、体よく裏通りへ引越させられた後だった。それに悪いことには、彼の商売が台所口にころがっていることであつた。台所口に廻るのには女房の方がよかつた。それで毎日女房を方々の台所口へ廻らせたのであつた。一枚の着たっきりの彼女の着物にくらべたら、どこの台所の女中でももう少しマシなものを着ているからだつた……なにもかも彼女の氣を腐らした。そうと彼が合点したのはこの頃のこととて、仲人が切をつけに来てからだいぶの日数が立っていた。

そういえば、来てまだ間のなかつた女房の口から、「いい店だなんて……いい店どこるか。」だから来たのが間違っていたという口吻を聞いたことがあつた。彼はその時分、ただ薄笑つておいた。なぜなら嫁

たものが出て行くなどとは思ひもしなかつたからであつた。實際彼の目に一かどの店と見えたものが、その通り女房の眼に映らなかつたことが、彼の不幸のはじまりだった。

女房が他へ嫁づいたという噂が彼の耳に入つたのは、半年後だった。彼はその日、心から怒りを発した。木綿の財布に有り金のすべてを、それも三円そこそこの小錢を突っ込むとすぐ女房の家の方へ出かけて行つた。

「まだおれが別れたと云わない以上はおれの女房だ。親だからつてそうそう勝手なことは許せるもんか。」彼は坐るとすぐ怒鳴つた。兵隊から帰つた身体のがつしりした息子が母親達を守つていた。こじれていたのは、ついその前迄のことだった。女房の家の方ではもうとくに片づいた話だった。彼は齒ぎしりをした。一度でも女房に向つて悪いことをした覚えはなかつた。只、貧乏で困るだけであつた。その貧乏も彼は放つておいたわけではなかつた。とても防ぎがつかないだけのことであつた。貧乏といへば、それは自分一人の事実ではない。金持よりも以上に貧乏人の方が多いいのだ。貧乏だからとて、女房をまき上げられてしまつては生きる瀬がないと思われた。彼は殺氣立つた。言葉よりは仕打で復讐するより考えがなくなつた。

昼のうちに帰つたと見せて彼は山の方へ入つて行つた。

彼は木立の間に足を入れながらこんなとこに幾日隠れていても誰一人自分を見つけるものはない、と考えた。それはど人影がなかった。併し彼は知らなかった。彼自身がこの山の方では珍らしい一人の人間であることを気がつかなかったのであつた。彼はとくに村の人から見定められていた。その上彼はとても日の暮れきるまで、自分の怒りをこらえきれなかった。うかうかと林の中に蹲^かんでいたら彼自身火になってしまうかも知れなかった。そこで彼は女房の家の方へそつと忍んで行つて母家の裏へ入つた。暗がりでは彼は二度マツチを摺りつけた。ばアつと四辺^{あたり}があかるくなつた時、彼は肩を掴まえられていた。

その晩のことを彼は思い出す時、ぞつと身体が寒くなつた。なぜあの日あんなにまで身体が火照つたかを驚くくらゐだった。赤々と狂い立つ火焰を想像すると、あの晩あすこの人達に謝罪^{しやい}つたことは口惜しかったが、その場で早く見つけられたからこそ助かつたのであつた。——それが彼の氣持の最後の締めくくりだった。彼も女房を諦めた。

誰か彼の傍へ寄つて来て、

「一人じあさみしかる。」などと愛想でもないえば、

「なアに……」と多寡をくくつたように彼は恍^{とほ}けるのだつた。「今度近々にいいのを貰うつもりだよ、話はあるんだ、

只どうも年廻りが悪いつてことだね。」

なにしろ彼はこの村へ何年か早く來過ぎたのであつた。

まだ貸地の甘い経験^{けんけん}を少ししか知らなかったこの村の百姓は、肝腎のまる一日を洗足^{はだし}で働^{はたら}き通しているのであつた。而かも洗足の百姓を無理に履物屋の華客^{かかく}には出来ないのであつた。そこで彼はこの東京近郊の村に入り込んで来る文化住宅の人達に希望^{のぞみ}を繋いでみた。而かも都会から続々と入つて來たそれらの人達の大部分は靴の方を穿きならしている側であつた。彼にとつて不利なことは一つ二つで止まらなかつた。

店立は喰うし、女房には逃げられるといったような次々の不幸の中で、方々の裏口から裏口、台所から台所といった具合に歩き廻つた。偶に賑かになつた駅前を通る時は、彼も自分の後に入つた同業の下駄屋を覗き、怨み妬^{ねた}みに堪えなかつた。いい下駄屋の面目というものもあるのに、店の片隅で齒入れまでもやっているからであつた。新しい品物を商っているだけで沢山なのだ。いい店で齒入れをかねるからこそ、なにもかも間に合つてしまふのである。一体、なんだつてそんなにまで商売を調法にやらなければならぬのか。